

「あなたをフォローしています」

美野哲郎

登場人物

黒木花／エリン（声） （23） マッサージ師。

一色陽司 （45） 美容師。花のストーカー。

足立里穂／リデイ（声） （21） マッサージ師。花の後輩。

シブヤ（声） 『コクーン』女性アバター。

アテナ（声） 『コクーン』女性アバター。

蔵本ちひろ （25） 派遣SE。

祭田雄介^{まったりだ} （27） イベント運営。

スバル（声） 『コクーン』男性アバター。

マイロ（声） 『コクーン』男性アバター。

カフェの女性店員 東南アジア系。

アパート住民の主婦

○コクーン・カフェテラス（アニメ）

（SNS『コクーン』内仮想空間）

表参道モチーフの街角のカフェ。

3Dアバターの女性四人がお茶。

会話中、頭上にアカウント名表示。

『エリン』小柄で、ピンクの短髪。

エリン「朝イチ観て来ました、『スウィー

ツ・プリンセス』極音上映。ああ、もう、

アニメ映画全部あの形態で上映して欲しい」

『シブヤ』青いボブ、柔らかな雰囲気。

シブヤ「朝イチか。いいなー、モール勤務。

シネコンまで直だもんね。エリンさん、愛

媛でしたっけ？」

エリン「徳島ですよお、シブヤさん。あれ？

シブヤさんってどこ住みとか訊いていいん

でしたっけ」

シブヤ「あら。私？ わからない？」

エリン「へえ？」

エリン、まじまじとシブヤを見る。

『リディ』Kポ風メイク、髪は緑。

リデイ「先輩。マジで言ってるんスか」

エリン「どういうこと？」

リデイ「渋谷っすよ、シブヤさんは」

エリン「あっ！ シブヤってアカ名、そういう由来の。ひえー、今さら気づいてしまった。お恥ずかしい」

エリン、手で自分の顔を仰ぐ。

シブヤ（微笑んで）「本名だと思ってた？」

エリン、シブヤを見る。

余裕を浮かべた笑み。麗らかな後光。

エリン「（見惚れて）……」

『アテナ』赤髪にサングラス。

アテナ「こうしてお喋りしてても、互いに地球の裏側にいるかも知れねーんだからよ、いつそ好きに想像すればいいんじゃないんじゃん？」

シブヤ「アテナさんは男前ね」

アテナ「このアバターのイメージだろー。本当のあたしの姿は、誰も知らないもんね」
シブヤ「あら。私だってそうじゃない？ ねえ、みんな想像してみて。本当の私って、

どんな女性だと思う？」

エリン「本当の、シブヤさん」

シブヤ「どう？ エリンさん」

悪戯に見つめられ、緊張するエリン。

シブヤ「想像できたら、教えてね？」

エリン「……はい」

リデイ、唐突に驚いた顔して、

リデイ「あ、先輩。お客様、お見えになって

ますよ」

エリン「へ？」

リデイ「前見て下さい、前」

驚くエリン、前を向く。

○シヨッピングモール・マッサージ店・受付

受付に立つ、黒木花（23）。

地味な黒髪で、目は伏せがち。

胸元にネームプレート『黒木花』。

手元のスマホに『コクーン』の画面。

実際は平面的なデザイン。エリン達ア
バターの簡略化された姿と、先ほどと

同じ会話のチャット画面が流れている。
顔を上げる花。

目の前に日焼けして筋肉隆々の一色陽
司（45）、スマホ片手に立っている。
花が動いた拍子に指がシブヤのアイコ
ンに触れ、シブヤのホーム画面に飛ぶ。
エリンに向けた表示。

『あなたをフォローしています』

一色「黒木ちゃん、仕事によそ見しちゃ
あ、（古いさんまのポーズで）ダメ、ダメ」

花「大変申し訳ありません、失礼しました」

花、焦って何度も頭を下げる。

一色、花を見下ろし、満足げ。

店内から覗く足立里穂（21）。

手元のスマホ画面に、リデイとしてエ
リンに先の内容を呼びかけている文字。
『あ、先輩。お客様、お見えになっ
てますよ』

里穂、溜め息を吐き、引っ込む。

○ショッピングモール・外観

T 『徳島』

○同・マッサージ室

花、うつ伏せの一色に施術中。

一色「黒木ちゃんのアドバイスのお陰でね、
風呂上がりとかもめっちゃ肩揉んでたらね、
血流よくなって耳のつつかえ取れてさ」

花「あ、わあ。それは良かったです」

一色「耳鼻科のヤブ医者適当ぶっこきやがっ
てよ、あの野郎。黒木さんの方がよくわか
ってんじゃない。(大声)ねえっ？」

花、一色の大声に萎縮し、

花「いえそんな。たまたま、前にそういうお
話されたお客様がおりまして」

一色、不意に花に振り返り、

一色「えっ？ そいつ男っ？」

花、ビクツと驚いて、

花「え？ ……いえ、若い奥様です」
一色「そ」

一色、上機嫌にまたうつ伏せ。

一色「と、言うかさ、よく覚えてたよね。肩の相談したの半年は前じゃない？」

花「私、細かいことばかり気になって」

一色「職業病かねえ。いや―俺も美容師始めてから四六時中喋ってないと気が済まなくてさ。うるさいよねえ。ごめんねっ？」

花、苦笑して、タオルを取ろうと振り返る。反射的に悲鳴を上げる。

花「きゃあっ」

花、自身の尻を庇い、振り返る。

一色「どうした―？ でかい声出して」

花「あ。今、お尻……」

一色「ごめん、この体勢だと見えねえんだ。

今なんか触っちゃった？ ごめんね？」

花「……いえ、お気になさらず」

仕切りのカーテンから里穂が顔を出す。

里穂「（真顔で）花先輩、何かあったスカ？」

花「大丈夫。うん、大丈夫……」

花、自分に言い聞かせる。

○漁港・停泊場（夕）

風に吹かれる花、スマホを見ている。

コクーンの仮想空間へオーバーラップ。

○コクーン・砂浜（アニメ）

アバター達が黄昏れる夕暮れの海岸。

エリンM「コクーン。そこはアバターに扮したユーザーが各々のコミュニティで過ごす、ありがちで、忘れられかけたSNS」

エリンとシブヤが散歩中。

エリンM「その過疎り気味なユーザー数が、私にはちょうど居心地良かった」

シブヤ「ごめんなさいねエリンさん。最近アニメの話題に入れなくって。全然見る時間作れなくって」

エリン「そんなそんな、私はシブヤさんの、変な哲学？ みたいな眩き大好きですので」
シブヤ「こらこら、変な哲学言うな」

エリン「へへへ」

シブヤ「それで。どう？ 現実の私はどんな女性だと思うかって話。想像ついた？」

エリン「ああ……あの、私、実は最初っからシブヤさんのイメージはずっとあって」

シブヤ「うんうん」

エリン、シブヤを見つめる。

エリン「漠然としてるし、引かないで欲しいんですけど……シブヤさんは、私の中で理想の女性なんです」

シブヤ（フリーズし）「……」

エリン「シブヤ、さん？」

シブヤ（我に返る）「ごめんなさい。私っから自分で訊いておいて。そう、私が」

シブヤ、おかしそうに笑う。

エリン、慌てたように手を振って、

エリン「あ、あ、お仕事忙しいんですか？」

シブヤ「ええ。今日もイベントの準備」

シブヤがチャット上にアップした画像が、背景に四角く広がる。どこかのイベントホール内部、開場前の光景。

エリン「わあ、素敵です。いいな、シブヤさん、お仕事充実してて」

シブヤ「充実か。どうかな」

エリン「贅沢ですよシブヤさん、絶対私より人生充実してますって。渋谷でしょ、イベント運営でしょ。私なんて……」

マイロの声「今日も仲良しですなー」

言葉を遮られ、エリンが振り返る。

陽に焼けた男、『マイロ』がサーフィンスポード抱え近づいてくる。頭上にアカウント名表示。

マイロ「ばんわー」

シブヤ「あらマイロさん。こんばんは」

エリン、若干引き気味に対応する。

エリン「こんばんわー……」

マイロ「いやあ、いいですな。百合百合してますよなー」

シブヤ「好きねえ、そういう話」

エリン「百合って、私とシブヤさん？」

マイロ、エリンにニヤリと微笑む。

突然、背景が真っ白な世界に変わる。

○コクーン・DM空間（アニメ）

白い世界にエリンとマイロの二人だけ。

距離を詰められ、怯むエリン。

マイロ「（笑顔で）ねえねえ、シブヤさんに
ガチ恋してるの？ エリンちゃんは、男じ
やダメな人？」

○SNS『コクーン』画面

ダイレクトメール（DM）欄。マイロ
からエリンへ、台詞と同じDMが届く。

○コクーン・DM空間（アニメ）

エリン「マイロさん、DMは緊張するから、
いきなりするのやめましょう？」

マイロ「マジで？ ごめんねー。ところで
エリンちゃん、徳島住んでるんだよね？」

海の近く？」

エリン、返事に窮する。

マイロ「今度さ。リアルでも会おうよ」

マイロの顔、恐い顔文字に化ける。

○漁港・停泊場（夕）

花、マイロのアカウントをブロック。

○コクーン・砂浜（アニメ）

エリン、マイロに手のひらを向ける。

エリン「ブロック！」

エリンの前に、透明で巨大なブロック
が出現し、マイロを中に取り込む。

マイロの姿、中で消え去る。

ブロックも小さく収縮し、消える。

エリン、動悸の激しい胸を抑える。

涼しげなパレオ姿でリデイが歩み来る。

リデイ「大丈夫スカ先輩、またマイロに絡ま
れてませんか？」

エリン「……えへへ、ブロックしちゃった」

リデイ「おおう。先輩もやるじゃないっスか。
いいんスよ、それで」

エリン「シブヤさん、ごめんなさい急にリップ
途切れちゃって」

エリン、シブヤに振り返る。

シブヤの姿は遠く移動しており、清潔
感のある長身男性アバター『スバル』
とお喋り中。頭上にアカウント名表示。

エリン「あ……」

いつのまにかエリンの隣りにアテナが
立ち、三人して遠巻きに眺める。

アテナ「シブヤさんとスバルさん、話し込む
とツリー長げえんだよな。知らない横文字
ばっか飛び交うしよ」

エリン、親しげなシブヤとスバルの様
子を見て、頬を膨らませる。

アテナ「リアルの彼氏だったりして」

エリン、いやいやと首を横に振る。

○黒木家・外観（夜）

○同・風呂場（夜）

湯船に浸かった花、防水ケース入りのスマホで動画を眺めている。

花「何の話？ ……アニメの話しなよ」

シブヤとスバルの返信ツリ。マニアックな映画の話題で、横文字だらけ。

里穂からメッセージ通知『花先輩も会話に加わればいいじゃないですか』

花「だって…私、スバルさんのことは一方的にフォローしてるだけだし」

花、ボヤきながら顔を湯船に沈める。

○ショッピングモール・マッサージ室

花、うつ伏せの一色に施術中。

花「あ、あの。一色さん、高い頻度でご利用頂いておりますが、もみ返しなど何か不調はございませんでしょうか」

一色、呻くだけで、返事しない。

花、一色の肩を軽く揉みほぐす。

一色（声を堪え）「痛てて…」

花「痛みますよね？ 肩のあたり、筋肉が疲

弊してる可能性もございます。頻繁な施術は、もみ返しの原因となりますので」

一色「大丈夫。痛いけど気持ち良いから」

花「……お気を付けてください」

不意に、一色の手が花の手首を掴む。

花、驚いて手を引こうとするが、一色の強い握力に抵抗出来ない。

花「（か細く）一色さん……痛い、離して」

一色、首だけゆっくり振り向く。

一色「昨夜は俺の心の方が痛かったなー。エリンさん、いきなりブロックだもんな」

花（呆然）「……は？」

一色「あれ？ 気づかなかった？ 俺、マイロだよ」

花「え……」

一色とマイロの姿、オーバーラップ。

花「はっ？ えっ？」

一色「ダメだよ？ いつも無防備に客前でスマホいじっちゃってさ。仕事とプライベートは分けないと、バレバレなんだよな」

花「やだ……離してくださいっ」

一色、パッと手を離す。

一色「怖いなー、大声出さないでくれる？」

仕切りから里穂が顔を出す。

里穂「花先輩？」

里穂、怯える花と一色を見比べる。

里穂「先輩、呼び出しです。お客様、私が引

き継がせて頂きます」

一色、にやけて体を起こす。

一色「いいよいいよ、帰るよ」

一色、里穂の肩に手を置く。

一色「君はそもそも俺のことフォローもして

くれないよね？ リデイ」

里穂、嫌悪感に顔を歪ませる。

○同・バックヤード（休憩時間）

花、食事が手につかず、ひたすらスマ

ホでコクーンのチャットを辿っている。

里穂「ストーカーっす。通報しましょ」

花「そんな、大げさ……」

里穂「全然大げさじゃないっスよ？ もう一色さん入店禁止してもらいましょうよ」

花「……店長には、もうお願いしてるの。あのお客様、触ってくるから嫌です、って」
スマホを弄る花の手、震えている。

里穂「それで？」

花「そしたら店長、『大事なお客様だから、徐々に慣れなさい』って」

里穂「はあっ？ ……この店辞めよっかな」

花、コクーンに目を落として、驚く。

花「あれっ？」

シブヤのホーム画面。『あなたをフォローしています』の表示が消えている。

花「どうしよう。里穂ちゃんどうしよう」

花の甘えた泣き声に、呆れ顔の里穂。

里穂「今度はどうしたんスか？」

花「私、シブヤさんにフォロー外されてる。

リムられちゃったみたい」

花、必死にチャットを辿る。

花「私、地雷踏み抜いたのかな。何か、嫌な

こと呟いちやったのかな」

里穂「ちよつと見せて下さい」

里穂、強引に花からスマホを奪い取る。

花「ああ、待って、（指先で画面の多くを隠し）ここだけ見て」

里穂「余計なところ見ませんから」

里穂、チャットを眺める。

花「……どう？ 不快？」

里穂「これだけじゃなんとも」

花「そうかな。じゃあ、次ね」

花、チャットをスクロールしていく。

里穂「……何日分見せるつもりですか。休憩終わっちゃいますよ。シブヤさん自身、最後の書き込みは何て？」

花、シブヤのチャットを辿り、

花「昨夜、あのままスバルさんと映画や舞台の感想やりとりしてて、それきり」

花、神経質にスマホを弄り続ける。

○コクーン・浜辺（アニメ）（一週間後）

エリン、人混みの浜辺を歩く。

誰に向けるともなく、呟き続ける。

エリン「シブヤさん一週間前から呟き止まってるんだけど。どうしたんだろう」

人のすぐ傍で、人の目は見ずに呟く。

エリン「シブヤさんにリムられちゃった。気に障ったことがあるなら謝りたいな」

お喋りしている人同士の間で呟く。

エリン「シブヤさんのリア友いないかな」

リデイの声「先輩」

振り返ると、リデイが追いつく。

エリン「リデイ。あ、店長怒ってる？」

リデイ「そりゃ一週間も来なけりやね」

エリン「一色さんは……？」

リデイ「来てません来てません。流石にやべーって自覚はあるんじゃないスか。もう、どうでもいいっすけど、あんな店」

安堵するエリン、また周囲を見回す。

リデイ「先輩。どうして、そんなにシブヤさんにこだわるんスか？」

○マンガ喫茶・外観

○同・個室

寝転がる里穂、スマホを見つめる。

里穂「うちがいるのに……」

エリンからDMが届く。同内容の声。

花の声「私ね、親にネット禁止されてたし、友達もいなくて。二十歳過ぎてSNS始めて、バカみたいに緊張してたの」

○回想・コクーン・都市・鳥瞰（アニメ）

夜の高層ビル群。高級ホテルに明り。

花の声「社交場デビュー、みたいな」

○回想・コクーン・社交場（アニメ）

ホテルの高層階パーティー会場。着飾ったアバター達。窓に広がる夜景。

簡素な服（初心者アバター）のエリン、緊張しながら人々の間を縫う。

花の声「ネットはまだ薄明かり。右も左もわからないでいた私と、最初に繋がってくれた人が、シブヤさん」

エリン、振り返る。

ドレス姿のシブヤが階段を降りてくる。
シブヤ、エリンと目を合わせ微笑む。

花の声「人生で、初めての友達だったの」

× × ×

エリンとシブヤ、語らう。

花の声「シブヤさんに出会ってなかったら、私、今でもコミュカゼロで、里穂ちゃんに声掛けられても無視してたと思う」
里穂の声「『出会ってなかったら』って。実際、先輩とシブヤさんはまだ出会ってないじゃないスカ、リアルで」

○現在・コクーン・砂浜（アニメ）

いつのまにかエリンとリデイの間に割って入る形でアテナが立っている。
アテナ「直接、会いに行ってみっか？」

エリンとリデイ、驚いて振り向く。

アテナ「探してんだろ？ シブヤさん」

リデイ「アテナさん、いつもいきなり」

アテナ「へっへっへ。あたし、巻き込みリプとか気にしないタイプだから」

リデイ「気にしろっての」

エリン「待って下さい。直接って？」

アテナ「だから、シブヤさんが暮らす渋谷の街に、エリンちゃんが直接押しかけちゃえばいいんじゃない？ って話よ」

エリン、リデイと顔を見合わせる。

エリン「知ってるんですか？ 居場所」

アテナ「居場所ってか、シブヤさんの勤め先ね。アップする写真でヒント出しまくってるもん。ちよっと調べたら楽勝よ」

エリン「え、怖い」

リデイ「決まりじゃないスカ先輩。渋谷、アテナさんに案内してもらいましょ。東京住まいなんですよ？ アテナさん」

アテナ「まあね」

リデイ（嬉々とエリン見て）「先輩」

エリン、うつむく。

リデイ「先輩？」

エリン「……私ね、友達がいなかったから。

修学旅行とか、仮病で休んで、その」

リデイ「はい？」

エリン「……四国、出たことないの」

リデイ「ウソ……」

アテナ、思わず吹いて笑う。

アテナ「可愛い。大丈夫、任せろ。あたしが

ちゃーんと案内したげるから」

リデイ「ですって、先輩」

エリン「リアルの……シブヤさん」

フラッシュ・インサートー

・優しいアニメのシブヤの笑み

・リアルなシブヤの職場の写真

×

×

×

エリン「どんな人なんだろう」

アテナ「どうする？」

エリン、リデイを見る。

リデイ、肯く。

エリン、アテネを見る。

エリン「行きます…私、行きたい」

○徳島阿波踊り空港・外観

○同・ターミナル

花、不安げに搭乗ゲートへ向かう。

里穂、手を振って見送る。

○飛行機・機内

窓際の花、緊張して肘掛けを掴む。

離陸する飛行機、瞬く間に海上へ。

○コクーン・川辺（アニメ）

美しい森林、小川に足を浸すリデイ。

その隣りにエリンが腰を下ろす。

エリン「今、雲の上にいる」

リデイ「知ってますよ今見送ったんで」

エリン「お願い、フライト中は繋がってて」

リデイ「はいはい。ああ、それで、シブヤさんの眩き途絶えた原因、うちなりに考えてみたんすけど」

エリン（身を乗り出し）「うんっ」

リデイ「うち、元々は推しアイドルの情報収集にコクーン使ってた。で、まあちよっと厄介オタクだったっていうか」

リデイ、言い淀む。

リデイ「暴れすぎたっていうか。凍結されちゃったんですよね、前のアカウント。今の垢も実はちよつとヤバかったりして」

エリン「よく、わかんないんだけど？」

リデイ「あ、だから。シブヤさん、凍結とはいかないまでも、ちよつとログイン出来ない感じになっちゃってるとか」

エリン「何か問題起こして？ いやいやいやシブヤさんに限って、それは無いでしょ」

リデイ「いいっすか、先輩。リアルのシブヤさんが危ない人じゃないって証明するものは、何も無いんすからね？」

エリン「……まさかあ」

○羽田空港・発着場

飛行機が着陸。

○同・国内線ターミナル

花、到着早々スマホを取り出す。

○走行中の京急線・外観

○同・車内

花、ドア前に立ち、景色を眺める。

その隣りに、3Dアバターのアテナが顔を覗かせる。花のイメージが現実の光景に入り込んでいる状態。

アテナ「どうだい？ 初めての東京は」

花の手元のスマホ。アテナが台詞と同じDMを送っている。

花「あの、すごくワクワクしてます。シブヤさんにだって会える気がしてきました」

アテナ「きつとね。さ、どこで待ち合わせする？」

花、返信を打ち込んでいく。

『せっかくなので、渋谷の』

○渋谷・ハチ公前

花、そわそわと落ち着き無く待つ。

アテナの主観。こちらに背を向けた花を見つけ、そっと近づいていく。

花、スマホに返信。同内容の声。

花M「シブヤさんのことばかり気にしてたけど、アテナさんとの初対面、今さら緊張してきました」

アテナからの返信。

『あのね、少しビックリさせてしまいかもだけどさ。あたし、まだエリンちゃんに言っていないことあるんだよね』

× × ×

花のイメージ。アテナが、後ろから少しずつ花に近づいてくる。

× × ×

アテナからのDM。

『あ。エリンちゃん見つけた』

花、肩に手を置かれ、緊張しつつもワ
クワクして振り返る。

花の後ろ。スマホ片手に、一色が狂っ
た笑みを浮かべ立っている。

一色「アテナの正体も俺なんでしたあーっ」

花「！」

花、衝撃と恐怖で声もなく硬直。

一色「どうした？ エリンちゃん。マイロの
時みたいにブロックしてみる？」

花、口をパクパクさせて、辛うじて聞
き取れるか細かい声を上げる。

花「どうして……？」

一色「半年前バッグ忘れなかった？ モー
ルの案内所に届いてたでしょ。あれね、こっ
そり盗ってたの、（自分を指し）あたし」

花「（愕然）」

一色「ダメだよ暗証番号は考えなきや。あれ

でエリンちゃんのこと、黒木ちゃんのこと、全部わかつちやった」

花、周囲を歩き交う人々を見やる。

一色「助け、求めてみたら？」

一色、ニヤけて見守っている。

花、声を出せない。

一色「それか警察行く？ そこに交番あるよ。行ってどうするの？ スマホ見せる？」

一色、スマホ画面のエリンとアテナで交わしたDMを花に見せつける。

一色「『アテナさんと待ち合わせて、アテナさんと会えました。だからアテナさんは私のストーカーです』って？」

花、後ずさる。

一色「おいおい、まいったな。ビビリ過ぎでしょ。俺、まだ何かしてくれなんて言っていないじゃない」

花「……なに、が」

花、声がかすれる。

一色「聞こえない」

花、必死に声を絞り出す。

花「何が、目的なんですか」

一色、一思索して、首をひねる。

一色「別に？　ただ、エリンちゃん…：黒木ちゃん。ああ、面倒臭いな。どっちで呼ぼうか。あ、下の名前でいい？」

花、怯えて首を横に振る。

一色（満面の笑みで）「ハーナちゃん」

花の頬に落ちる雨滴。降り始める雨。

一色「俺はただ花ちゃんとシブヤさん探してさ、一緒に仲良くなりたくなって、それだけだよ。シブヤさんともきつと話会おうし」

花「あ、会ったことあるんですか？」

一色「うん？　いや、全然。でもきつと美人なんだろうなあ」

一色、雨が気になって見上げる。

花、その隙に走って逃げ出す。

○渋谷・スクランブル交差点

青信号。人混みをかき分け逃走する花。

振り返ると、一色が後を追ってくる。
雨が本降りになってくる。
花、人混みにぶつかりながら、がむし
やらに逃げる。

○コクーン・川辺（アニメ）

エリン、泣きそうな顔で走る。

エリン「里穂ちゃん、里穂ちゃん」

座り込んだリデイの後ろ姿。

エリン「リデイっ 助けてっ」

エリン、リデイの肩に手を置き、すが
るようにその顔を覗き込む。

リデイ、凍って固まっている。

エリン、ハッと息を呑む。

○SNS『コクーン』画面

リデイのホーム画面に表示。

『このアカウントは現在、凍結されて
います』

○渋谷・雑踏

花、振り返る。遠く迫り来る一色の姿。
花、引き続き逃走。

○表参道・カフェテラス

花、カフェの軒下で雨宿り。荒い息。
メイクも衣服も乱れ、髪は濡れている。
東南アジア系の女性店員が顔を出し、
花に声をかける。

店員「そこ濡れるよ。入りませんか？」

花、振り返り、ハットする。

フラッシュバック――

冒頭、ここによく似たコクーンのカフ
エで、シブヤ、リディ、アテナとお喋
りしていたエリン。花の理想の姿。

× × ×

花、ガラス窓に映る、雨に濡れ汚くよ
れた自分の姿を見る。目に溜まる涙。

花（小声）「あ……大、丈夫……」

店員（聞き取れず）「はい？ 日本語わかり

ますか？」

花「い、いいです」

花、雨の中へ飛び出す。

○マンシヨン・軒下

花、雨宿り。泣き出しそうな顔で、ス

マホの中のコクーンを眺めている。

エリンのアバターが助けを求める。

『誰か。助けて』

花「誰か。お願い気づいて」

充電残量の警告表示。

『バッテリーの充電が少なくなつて

います。残り12%』

○コクーン・砂浜（アニメ）

エリン、アバター達の中を走る。

エリン「ねえっ、誰かつ」

それぞれ内輪のコミュニティで話し込

み（頭上に吹き出しでチャットが浮か

んでいる）、誰も振り返らない。

エリン、人々の中で立ち尽くす。

エリン「私の世界なんて、無かったんだ」

エリンの姿だけが生身の花に変わって、
アニメの世界で泣いている。

花、涙を拭いながら歩き続け、ふと視線を上げる。

堤防でスバルが釣りをしている姿。

花「スバルさん……」

花の姿、エリンのアバターに戻り、堤防に向かって駆け出す。

○コクーン・堤防（アニメ）

エリン、スバルの背後に近づき、緊張で深呼吸。思い切って口を開き、

エリン「スバルさん。いきなり失礼します。

私、シブヤさんと親しくさせて頂いている

エリンという者なのですが」

スバル、エリンに振り返る。

スバル「はい？」

エリン「あ、あの……」

エリン、たどたどしく言葉を振り絞る。

エリン「ごめんなさい……今、現実の私、とてもパニックで。どこから伝えていいのか
わからなくなってしまっただけ」

スバル、釣り竿を置いて向き直る。

スバル「はい」

エリン「……あの。もしお時間よろしければ、
お話聞いていただけますでしょうか？」

スバル「長い間、フォロー返さなくてごめんなさい」

エリン「え？」

スバル、微笑む。

スバル「エリンさん、随分とシブヤさんに懐いてらっしゃったから、嫉妬しております。それで、一体どういったご用件で？」

○SNS『コクーン』画面

エリンのホーム画面。通知が届く。

『スバルさんにフォローされました』

○マンション・軒下

花、階段に腰下ろしうとうと。

ちひろの声「あなたが、エリンさん？」

花、顔を上げる。

傘を差した蔵本ちひろ（25）の姿。

ボブヘアにワンピース。コクーンでの

シブヤを想起させる女性。

花（見惚れ）「……」

ちひろ、腰を屈めて花を見る。

ちひろ「初めまして。この姿での名前は、蔵

本ちひろと言います」

花「……シブヤさん？」

ちひろ「あー……」

ちひろ、少し困った表情。

ちひろ「私、スバルです」

花、呆然。

○走行中のタクシー・車内

雨が窓を叩く。ラジオから音楽。

花、くたびれた顔でシートに凭れる。

隣りに座るちひろ、タオルで花の顔を拭いてやり、花はされるがまま。

花、小さな声で抗議する様に、

花「男性のロールプレイで、楽しんでたんですね」

ちひろ「そういう言い方も出来るかな」

花「…みんな騙して、面白いですか？」

ちひろ「うーん。今の私の方が、自分にウソついてるんだけどな」

花「え？」

ちひろ「スバルはね、私の理想の、こうなりたかった自分なの。この体で生まれた出発点からして、まったく遠かった理想のね」

花、ちひろの姿を見る。

オーバークラップするスバルのアバター。

花、徐々に理解し始め、

花「あ…私、ごめんなさい」

ちひろ（笑って）「いきなり告白する話じゃなかったわね」

花「こんなに…こんなに素敵な女性なのに」

花、言った後で自分の口を押さえる。

花「間違えた。ごめんなさい」

ちひろ「いいえ。私自身、違和感を認めて自覚するまで随分かかったしね。そうだな、褒め言葉と受け取っておこうかな」

ちひろ、自分の姿を花に見せびらかし、ちひろ「これも頑張って作り上げた、この世界での私のアバターだから」

○住宅街（夜）

都市部を離れ、緑が増えてきた辺り。
アパート目指してタクシーが走る。

○アパート・外観（夜）

駐車場に面したベランダ側からの光景。
二階の部屋に明りが点き、ちひろに案内されて疲れた足取りの花が入室。

○ちひろの部屋・風呂場（夜）

花、シャワーを浴びている。丁寧な指

先で頭をほぐし、リラックスする表情。

○同・リビング（夜）

風呂から出てくる花、パジャマに着替えて
えている。バスタオルで髪を拭きなが
ら、外の土砂降りを眺める。

ちひろがココアをテーブルに置く。

ちひろ「ココアをどうぞ」

花「本当、すいません。お着替えまで」

ちひろ「まあ、あれじゃあね」

吊した花のバッグ、水びたし。

花、ココアを一口。安堵の溜め息。

ちひろ、楽しげに向かいに座る。

ちひろ「ごめんね。少しスマホいじって、エ

リンさんから貰ったリップ消しちゃった」

花のスマホ、部屋の隅で充電中。

ちひろ「アテナさんに見つかり、不味いん

でしょ」

花「あ。はい、ありがとうございます」

ちひろ、花の姿をまじまじ伺う。

ちひろ「こんな可愛らしい人なのに」

花（ドギマギ）「あ。え？」

ちひろ「言いづらいこと、言ってもいい？」

花、緊張してパジャマを掴む。

ちひろ「エリンさんは、アテナさんに追われて、怖かったよね？」

花「はい……」

ちひろ「じゃあ、ね？ フォロー外れたからって、徳島から東京まで追って来られたら、シブヤさんどう思うかな」

花「あ……」

花、固まる。

花「……私。そんな事、考えてなかった。違うんです、怖がらせるつもりなんか全然」

花、言葉を飲み込む。

花「……最低だ」

ちひろ、笑って花に手を重ねる。

ちひろ「待って。繊細な人ね。いや極端なのか？ シブヤさんが本当はどう思うかなんて、私は断定するつもりないから」

花「でも」

ちひろ「シブヤさんは本当に慕われてたのね」

花、窓の外の雨を眺める。

花「……私、東京まで来ちゃったんですね」

ちひろ「そうだね。来ちゃったんだね」

花「……臆病な私に、人と接するきっかけをくれた人なんです。シブヤさん」

花、ふと笑みが漏れる。

花「シブヤさんがいなかったら、今、こんなに怖くて、こんなに不思議な展開を迎える事も無かつただろうなって」

ちひろ「私からしたら、随分大胆に行動出来る人って印象だけれど？ 会ってすぐの他人の家で、こんなにくつろいじゃって」

花「え……あの、私、凶々しいですか？」

ちひろ「そうじゃなくて。ほら、私、同性だからって、本当は安心していい相手じゃないんだからね？」

ちひろ、花の手を握り、迫る。

ちひろ「可愛い女性なら、誰でもウエルカム

です」

花「……自分からそう言ってくる方は、自制心が効く方だと思います」

ちひろ「おっと、牽制されちゃった」

ちひろ、笑って手を離す。

ちひろ「誰でもはウソ」

花、改まって立ち上がる。

花「あの、改めて、初めまして。私は、黒木

花と言います」

ちひろ「わ。本名も可愛い」

花「それで」

花、ちひろの目を見据え尋ねる。

花「ちひろさん。いえ、スバルさん」

ちひろ「はい？」

花「知ってるんですね？ シブヤさんのこと」

ちひろ「……んー」

ちひろ、苦笑を浮かべ、席を立つ。

ちひろ「待って。今、冷蔵庫に何もなくなって、

ちよっとスーパーで買い物してくるわ」

花「え？」

ちひろ「帰るまでに言葉を選べたら、ちゃん

と話すから……お願い」

花「……はい。待ってます」

×

×

×

花、ひとり留守番中。

チャイムが鳴り、振り返る。

花「はーい」

○同・玄関（夜）

花、忍び足でドアに近づき、覗き穴からそつと外の様子を伺う。

部屋の前に一色が立ち、笑っている。

花、驚いて身を引く。

外から乱暴にノックする音。

一色の声「花ちゃんいるー？ いるよねー？」

花、恐怖に立ちすくむ。

一色の声「バカだよねー、花ちゃん。SNS

だけの知り合いなんて信じちゃいけないっ

て、俺で学ばなかった訳？」

花、愕然。

一色の声「マイロやアテナはやべー奴で、スバルさんは信じていい相手だなんて、どうしてそう思えた？」

花「（思わず大声）ウソだっ」

花、慌てて口を押さえる。

しばらくの間。

一色の笑い声が響く。

一色の声「ああ。ウソだよっ、ごめんねっ、でもそこにいるんだねっ？」

花、ドアにチェーンロックを掛ける。

一色の声「花ちゃんすぐ欺だまされるから面白えんだよなあ。スバルさんのインスタ見たらさ、簡単に住所特定出来たわっ」

花「（声を振り絞り）どうしてそんな私に付きまとうのっ？ 気持ち悪いっ」

しばしの間。

勢いよくドアを蹴りつける音。

花、ビクッと身構える。

一色の声音、恐ろしくドスを効かせ、

一色の声「先に隙見せたのはそっちだろうが

よっ、その気にさせといて気持ち悪いとは
どういう了見だこのクソアマっ」

○アパート・二階廊下（夜）

一色、ドアの前で怒鳴り散らす。

一色「もう俺45だぞ。この先幸せになるチ
ヤンスなんかねえんだよ、俺みたいなもん
にっ」

並びの別宅のドアが開き、住人の主婦
が顔を覗かせる。

一色「見てんじやねえ殺すぞババアっ」

主婦「警察、呼びますからっ」

主婦、言い捨ててドアを閉める。

一色「だってさ、聞いたあー？ 花ちゃん。

ご近所さん、警察呼ぶってさっ」

一色、笑ってドアを蹴り続ける。

○ちひろの部屋・リビング（夜）

後ずさる花、耳を塞ぐ。

一色の声「警察が来るのが先かつ、帰ってき

たスバルさんが俺に犯されるのが先かつ」

花、ハツとして手を離す。

一色の声「花ちゃんが出て来てくれるのが先かつ」

花、スマホを充電器から取り上げ、焦ってスバルにDMを送る。

『スバルさん。見てますか？ あの男に見つかりました。お願いします帰って来ないで』

花「スバルさん、出て」

花、振り返り、ベランダを見る。

○アパート・二階廊下（夜）

一色、耳をすます。

遠く、パトカーのサイレンが鳴る。

一色、焦った様子もなく不敵な笑み。

○ちひろの部屋・ベランダ（夜）

花、雨の中、手すりから外を見下ろす。
アパート裏の駐車場に停まっている車。

少し跳べばボンネットに降りれる距離。
花、顔を上げる。

遠くに都市のビル群が仄か見える。

オーバーラップして、コクーンの都市。

○回想・コクーン・社交場（アニメ）

エリン、ドレス姿のシブヤとお喋り。

シブヤ「いつもあなたのアニメの感想、興味
深く拝見しております」

エリン（驚き）「えっ？ 誰にも見られてい
ないと思ってました」

シブヤ「見てますよ。いいですよ、『スウ
イツ・プリンセス』。私、いい歳をして、
プリンセスが憧れなんですけど」

エリン、シブヤのアバターを眺め、
エリン「わかります」

シブヤ「エリンさんとなら、憧れを共有出来
るかなって。あ、それで、よろしければ」

シブヤ、エリンの顔を覗き込むように、
小首を傾げて微笑む。

シブヤ「あなたをフォローしても、いいですか？」

○現在・ちひろの部屋・ベランダ（夜）

花の表情、決意固まって。慎重に手すりの外へと跨ぎ出る。

花、手すりの外に立ち、慎重に眼下の車のボンネットの位置を確認。

雨で足が滑り、慌てて体勢を直す。

花、呼吸を落ち着かせ——跳ぶ！

同時に、近場で落雷。

大きな轟音と閃光が一带を包む。

○アパート・駐車場（夜）

ボンネットに着地した花、雨で足が滑り、尻もちを付く。

花、そのまま地面に転がり落ちる。

うめき声を上げ、体を起こす。

尻をさすると、割れたスマホがポケットから落ちる。

花（唇噛みしめ）「……」

花、スマホを投げ捨て、歩き出す、
尻が痛み、片足を引きずる形。

○住宅街・路地（夜）

駐車場を出る花。痛みで走れず早歩き。
何度も暗がりの路地を振り返りながら、
アパートから遠ざかっていく。
改めて振り返る。
その時、再び落雷。稲光りの閃光が、
路地に立ってこちらを伺う一色のシル
エットを浮かび上がらせる。

花「！」

花、早歩きで必死に逃走。
逃げながら、また振り返る。
一色、走り出す。全速力で近づいてく
る。

花、焦って逃げる。
あっという間に追いつかれ、背後から
一色に口を塞がれる。

花「（悲鳴を閉ざされ）——っ」

○住宅街・空き地（夜）

レンタカーが停まっている。

一色、花を引きずって連れてくる。

タオルで口輪された花、後ろに回した

両手首をベルトで縛られている。

○レンタカー・車内（夜）

一色、花を無理やり後部座席に押し込める。

花、タオルが口からズレた隙に、渾身の悲鳴。

花「嫌だ嫌だ嫌だっ、誰か助けてっ」

雨にかき消される声。

一色「おうおうハッキリ物言えるようになってきたじゃねえか、内気な花ちゃんがよ。

最初から、拒絶してくれりや良かったんだ」

一色、花の髪を掴み、顔を近づける。

一色「客と店員だからって、女が男に油断し

て媚び売ってんじゃねえよ」

花、一色の顔にツバを吐き捨てる。

花「あ、あなたに媚びを売ったつもり、一度も無い。ただの客だろうがっ」

一色、手を離し、冷静に手でツバを拭

うと、手の甲で花の頬を打つ、

花（痛み）「！」

一色「決めたから。花ちゃんを俺の最後の女にする。な？ お互いこんな所まで来た変態ストーカー同士。一緒に地獄へ行こうぜ」

花、涙を流し、首を横に振る。

一色「どうした？ ここをコクーンだと思っ
て、なんか呟いてみるよ。テメエも俺と同
じ異常者だって、いい加減わかってんだろ」

花「（呟く）私……シブヤさんに会いたい」

一色「……呟きつてのは、誰にも届かねえも
のなんだよ。こっちが勝手に、届いた気にな
ってるだけでな」

一色、外から力強くドアを閉める。

雨の音が一気に小さくなる。

○住宅街・空き地（夜）

車中で花が窓を叩き叫んでいる。

その声も音も雨にかき消される。

一色、窓の外から花を見下ろし、嗜虐的な笑みを浮かべている。

○レンタカー・車内（夜）

花、絶望し、叫び続ける。

声もかすれ、泣きながら窓を叩く。

花「誰かあーっ、誰かあーっ」

窓の向こうで楽しげに笑う一色の姿。

花「誰か…私に気づいて」

背後から男の腕が一色の頭を掴み、勢

いよく窓ガラスに叩きつける。

花「！」

花の目の前に、気絶した一色の顔。

一色、そのまま崩れ落ちる。

花、呆気に取られ見ている。

一色を見下ろす、まっりだ祭田雄介（27）。

その背後から息を切らしたちひろが、
心配そうに追いついてくる。

祭田、ドアを開け、花に手を伸ばす。

祭田「ごめんなさい、エリンさん」

花、驚いて祭田を見上げる。

祭田「私が、シブヤです」

○住宅街・空き地（夜）

祭田、花の手を縛るベルトを外す。

花、動揺。

祭田「ごめんね、痛くなかった？」

花、改めて祭田を見る。

祭田「驚かせちゃった、よね」

その男性としての姿を見つめ、

花「……」

震える手をゆっくり伸ばす。

祭田、その手を取る。

花「ごめんなさい……私、シブヤさんのこと
何も考えてなかった。自分のことばかり
で、こんなところまで」

花、泣き出す。

花「ごめんなさい……ごめんなさい」

祭田、困惑してちひろに振り返る。

ちひろ、抱きしめるようジェスチャー。

祭田、苦笑して、花を立たせる。

祭田「今は自分のことだけ考えて。どこか痛いこない？」

花、涙を拭いながら、祭田を見る。

一色が不意に動いて、祭田の足を掴む。

祭田「痛ってっ」

花「！」

ちひろ「（悲鳴）」

祭田、思わず膝をつく。

花「シブヤさん」

祭田「エリンさん逃げて」

一色、手を地面につっぱって、自分の体を起こそうとする。

花、指圧する時のように指先を曲げ、上から一色の肩を掴み、体重をかける。

一色「痛い痛い痛い痛い痛い」

一色、悲鳴を上げ、その場に崩れる。

祭田、一色の手から抜け出す。

花、続けて一色の肩を踵で踏んづける。

一色「（悲鳴）——っ、痛ってえ黒木ちゃん、

ごめんごめんごめん離せクソアマツ」

花「頻繁な施術はっ、もみ返しの原因となり
ますのでっ」

花、興奮状態で、最後に一色の肩に強
く足を振り落とす。

一色、激痛により失神。

花「お気をつけください、お客様」

祭田とちひろ、呆気にとられる。

○表参道・カフェテラス（後日）

青空。穏やかな日差し。

いつかの女性店員が花、ちひろ、祭田
の席にティーセットを運ぶ。

花（店員に微笑み）「ありがとう」

祭田、フェミニンなメイクや服装。

花の手をそっと包む。

祭田「どう？　少しは落ち着いた？」

花「ちひろさんが良くしてくださって……でも、まだ怖いです」

ちひろ「当然。けどもう、あれ以上怖い思いなんて人生にそうそう無いわ」

祭田「最後、格好良かったよ。惚れちゃいそうだった」

花、笑う。

花「私、今までもずっと怯えて生きてきて。でも、一番大きな嵐が、過ぎ去ってくれた気がします」

祭田「一番大きな嵐ね。一番最初の嵐かも知れないけどね」

花「え、怖い」

ちひろ「脅かさないの」

花、改めて祭田に頭を下げる。

花「この度は、本当に申し訳ありませんでした。私、自分がストーキングしてるって自覚もなかった。本当にごめんなさい」

祭田「うん。確かにちよつと怖かった」

花、顔を上げ、

花「それとシブヤさん。コクーンで私を見つけてくれて、ありがとう。あなたのお陰で、人生が少しだけ輝いたの」

祭田「……僕も。エリンさんが、僕を祭田雄介じゃなく、僕が理想とする女性像のシブヤとして慕ってくれて、嬉しかった」

花「あの……それでどうして、私はフオローを外されてしまったのでしょうか……？」

祭田「あ、いや、それが記憶に無くてさ。指が滑っていつのまにかフオロー外れてるって事ない？ 僕よくやっちゃうんだよね」

花（啞然）「え、それだけ？ でも、だって、何も眩かなくなっただじゃないですか」

ちひろ「ごめん、それ私のせい」

花「へ？」

祭田、頭を掻く。

ちひろ「私が、コクーンでシブヤさんに告白しちゃったの。それで、祭田さん自分のことをどう明かすか悩まれたみたいで」

花、二人を交互に見て、混乱。

花「え。どういう事ですか？」

ちひろ「会ってみてわかったわ。男になりたい私と、女になりたい祭田さん。私達、魂で言えば理想のカップルなのにねって」

花「……はい、そう思いますっ。え、お二人、付き合わないんですか？」

ちひろと祭田、互いに苦笑い。

ちひろ（男性口調で）「複雑なんだ」

祭田（女性口調で）「複雑なの」

花「はあ……」

祭田「コクーンの中なら、完璧なのにな」

花、スマホで互いのアバターを見せ合う祭田とちひろを眺める。

花の後ろに、3Dアバターのリデイが歩いてきて、話しかける。

現実とアニメが混ざり始める。

リデイ「どうでした？先輩。リアルは楽しかったですか？」

花、驚きもせずに応える。

花「うん。楽しかったよ」

リデイ、空いた席に着く。祭田とちひろ、当たり前前にリデイにお茶を注ぐ。

花「コクーンと同じくらい」

4人の姿、アバターと本人が二重写しになって点滅するように姿を変える。

背景も歩く人々も二重になる。

エリン、ふと周囲を見回す。

現実に表参道を歩く国籍年齢服装様々な人々と、色彩豊かなアニメのアバターたち。

エリン「ねえ、リデイ」

○SNS『コクーン』画面

誰かが覗いているエリンのホーム画面。

花の声「私も、誰かを見つけられるかな」

誰かに向けられている表示。

『あなたをフォローしています』

了。